

NPO法人 かながわ外国人すまいサポートセンター



ニュースレター №29

“すまセン”の窓口ではスタッフが6ヶ国語で相談を受け付けています。
アパート探しの内見や契約後の問題発生など必要に応じて通訳を派遣します。

お気軽にお尋ねください。

ごあいさつ



すまセンがおかれている YMCA の窓の外には色とりどりのチューリップが満開です。

この冬の厳しい寒さを過ごただけに春の訪れがより嬉しく感じられます。

すまセンは設立 18 年目の春を迎え、相談件数は約 1300 件に至りました。スタッフ
たちは懸命に相談に来る人たちに寄り添いながら問題解決に取り組みました。

日本は今、人口減少という課題を抱えていますが、外国人人口は増加傾向にあり、住まいや生活に困難を抱える
人たちからの相談は減りそうにありません。

特に近年、ネパール、ベトナム人は増加し続けています。また、かねてからタガログ語、タイ語での対応が課題
になっており、すまセンでは英語、優しい日本語で対応せざるを得ない状況です。このようなことから昨年、「活
き生き市民基金」に 4 言語通訳者育成に関する助成を申請し、助成を受けるに至りました。

支援の課題は時の流れに沿い変化しますが、困窮を抱える外国人に寄り添い自立を支えるという心だけは変えず
にいたいと思います。

かながわ外国人すまいサポートセンター理事長 斐安

かながわ外国人すまいサポートセンター

2018年度 会員総会

2018年4月21日(土)13:30～ 横浜YMCA 9階

2001 年 4 月にスタートしたすまセンの活動も、2018 年 4 月で 18 年目に入りました。当初すまセンの目的
は「県内に在住する又は在住を希望する外国人に対して、賃貸住宅入居から退去時にあたっての各種相談・支
援事業を行い、共に生きるより良い地域社会づくりに寄与すること」でした。今や、多言語による賃貸住宅入
退去支援が、生活相談にまで拡大してきています。なぜそうなったのでしょうか？ 賃貸住宅を探したり、退
去したりするには、そこに必ず理由があります。その理由を明らかにし解決してはじめて、家探しが可能とな
るのです。サポートする側には、理由を聞き出す力や、原因を解決するために必要な知識と経験、ネットワー
クの充実が求められています。

現在すまいサポートセンターのスタッフは 10 人で、5 言語をカバーしています。不動産業界では空き家対策
がさけられる中、他言語が話せるスタッフを採用し、言語面では外国人の家探しがイージーになっているよう
です。しかし、入退去や契約に関する説明が充分なされているかは疑問が残ります。なぜなら退去の際の原状
回復について「そんなこと聞いていない」と相談してくるケースが後を絶たないからです。

外国籍県民の抱える問題の複雑化に対応して、神奈川青年司法書士協議会との協働による無料相談会なども
実施していますが、今後はより大きな枠組みの中で、彼らのニーズにこたえていく必要があると考えています。
相談言語の多言語化、新たな住宅セーフティネット制度への参加、県や市町村居住支援協議会への協力な
ど、すまいサポートセンターが担っていく役割は、とてつもなく大きいと感じています。

18年目を迎え、期待される働きは？



かながわ外国人すまいサポートセンター 理事

山田 達也 理事へ突撃インタビュー！ 第二弾

有限会社 エスク 代表取締役、全日本不動産協会 神奈川県本部 理事

Q. 今後、すまセンに期待したいことは？

A. ある人が家探しの相談に来たとして、不動産業者では解決しにくい問題や、行政の手が回らない部分を「現場のプロ」としてこなしていただける存在であってほしいです。「行政—民間団体」の連携がスムーズに流れるための基盤がNPO団体だと思っています。

だからこそ、紙や資料にお金を使うのも大事だけど、何よりも「人」に使っていくのが重要だと思います。行政が忙しくて手が回らない部分をフォローできるのはNPOのスタッフだと思っています、行政も業者も安心して仕事を任せられるNPOとの連携があれば良いシステムが出来上がっていくと思います。

たとえば神奈川県内の横浜市、川崎市、他の政令指定都市、それ以外の地域をいくつかのエリアに分け、それぞれに担当の NPO 団体を置いたとします。電話をすれば、問題解決のために必要なところに確実につないでくれる、「ワンストップ」の窓口として、担当のすまセンなどの NPO 団体が機能すれば、そこを中心にしながら行政と民間業者が連携して問題解決に臨めるのではないのでしょうか。もちろんその土台には「国の政策」があり、それを推進していく居住支援協議会のような運営母体がある…、そんな仕組みがとても大事なのではないかと考えています。そういう意味では、国の政策である「新たな住宅セーフティネット制度」ができ、各都道府県でまちづくり協議会や居住支援協議会で更なる具体的な施策が進められています。その流れの中で NPO 団体を活用していこうという考え方が出ていることは歓迎すべきことです。

Q. 最近「すまセン」に来る相談も家探しで終わる場合は少なく、不動産店を紹介するだけでは解決しないこともしばしばあります。すまセンからの依頼は難しい問題を抱えていることが多いと思うのですが…。

A. 確かにそうですね。(笑) 商売としてはきついこともありますけど、私自身は不動産のプロとして、プロ意識を持って仕事をしています。家の相続などの問題も扱いますが、お客さんの話を聞いていると、人の価値観はそれぞれだなあと感じます。数学みたいに $4 \div 2 = 2$ とは行かない、お客さんにあわせて仕事をする「幅」が必要だと思っています。そのような気持ちで仕事をしているので、広い意味で捉えればお客さんの抱える問題に向き合うことも、不動産業者の仕事に含まれていると考えています。

何よりも大切なのは、お客さんに「安心」を提供できること。利益が上がったところで、その人のプラスになっているかどうか…、その視点を忘れないようにしたいですね。

また、ボランティア精神ではなく、「すまセン」の理事であることで、困っている人やトラブルを抱えている人たちをサポートできるということは、私自身の自負でもあります。まあ、すまセンから言われたら、断れないよね…。だって、最終的には誰かがどこかで解決しないといけない問題ですからね。



かながわ外国人すまいサポートセンターは、国土交通省住宅局が進める

「新たな住宅セーフティネット制度」の居住支援法人登録に向け、準備中です。



すまい・生活相談の4言語通訳研修 実施中！



2018年1月1日現在、神奈川県に住む外国人は198,504人、もうすぐ20万人に届きそうな勢いです。それに伴い、すまセンで対応を求められる言語も年々増えています。現場のニーズにこたえるため、既存の5言語と「やさしい日本語」に加え、「ベトナム語」「ネパール語」「タガログ語」「タイ語」の通訳スタッフを募集し、9人の通訳候補者が研修に臨んでいます。在日外国人の現状や不動産の基礎知識を学び、実地研修で窓口対応を体験しながら通訳の心得などを学んでいます。

(公益財団 かながわ生き生き市民基金「福祉たすけあい基金」助成事業)



インターン生のひと言

神奈川大学4年 川野 沙季

インターンを始めたきっかけは、貧困問題を考えたいと思ったことからです。大学の授業で、スカベンジャーとして生きている子どもたちや出稼ぎ労働者の子どもたちの存在をはじめて知り、経済的貧困から心の貧困が生まれ、そのことが子どもたちに大きな影響を与えるということを学びました。そこから、知識だけでは自分の中で納得がいかず、日本で生活をしている人はどのような貧困問題を抱えているのかを学び、自分に何が出来るかを考えたいと思い、すまセンの長期インターンに挑戦しました。

すまセンに訪問してくる外国人に出会う度、当たり前のように安心して安全に暮らすことのできる日本が、多様な文化を持っている外国人にとって、住みにくい日本であるということに気づかされました。また、パンフレットを作りながら、スタッフの皆さんの活動に対しての思いをそれぞれ聞く中で、「日本は住みづらい」と感じている人たちにとって、すまセンが大切な居場所であるということを実感しました。

そして、半年以上のすまセンでの活動で、自分自身が大きく成長したことを実感しています。

私は、インターンを始める前は、人生の中で実現したいことを持っていませんでした。しかし、すまセンで働いているスタッフの皆さんや他の団体の皆さんに会って様々な考え方を吸収していくうちに、「子ども達が将来の夢を考える時に、自分は旅行と言う手段でサポートをしたい」という目標を持つことが出来ました。目標が出来る事によって、多くの人に積極的に会うようになりました。1人1人の人生の中で何が影響を与えたのかを研究し、子ども達が様々な経験ができる機会を作っていきたいです。

約8ヶ月間、貴重な経験をさせて下さり、ありがとうございました。

パンフレットが、出来るだけ多くの「すまセン」を必要とする人のもとに届きますように…。



川野さんと作成した外国人用すまセンパンフレット。只今大急ぎで印刷中です。もうすぐ皆さんのお手元にお届けします！

会員入会・寄付のお願い

皆様のご理解、ご協力が「かながわ外国人すまいサポートセンター」の活動の力になります。会員となって私たちを支えていただければ幸いです。また、ご寄付も歓迎いたします。

正会員	年会費	賛助会員	年会費
(個人) 1 口	5000 円	(個人) 1 口	3000 円
(法人) 1 口	10000 円	(法人) 1 口	10000 円
(団体) 1 口	100000 円	(団体) 1 口	10000 円

* 4 月 1 日～翌年 3 月 31 日までの年度会費です。

振込先 【郵便局】00270-5-39032
かながわ外国人すまいサポートセンター

* 手数料はお客様のご負担となります。

相談窓口 & 対応言語



5月から変わります!

	10:00～13:00	13:00～17:00
月	スペイン語、コリア語	スペイン語、コリア語
火	英語、中国語	英語、中国語
水	英語、中国語、コリア語	英語、中国語、コリア語
木	英語、スペイン語	英語、スペイン語
金	英語、ポルトガル語、スペイン語	英語、ポルトガル語、スペイン語

◎月曜～金曜の午前 10 時～午後 5 時まで。
◎相談は、無料で受けております。
◎対応言語は日によって変わる事があります。
お電話でご確認ください。



ありがとうございました!

去年 11 月 23 日(祝)の横浜 YMCA ウェルカム・フェスタにて開催された、かながわ外国人すまいサポートセンターのバザーに、皆さんから多数の品物やご寄付を頂き、**収益金額は 37,980 円**となりました。そのうち、3000 円を【横浜 YMCA 国際協力募金】に寄付させて頂きました。

皆様のご協力の
賜物と厚くお礼申
上げます。

(菅原)

* 値付け作業中→



翻訳・通訳



- ❖料金・納期については、お問い合わせください。
- ❖通訳については、詳細をご相談ください。

<対応可能言語>

英語・中国語・スペイン語・ポルトガル語
韓国朝鮮語

(その他の言語についてはお問い合わせください)

<対応可能翻訳>

戸籍謄本・住民票・原戸籍・出生届・受理証明書
フィリピン PSA 証明書・課税証明書・等

アクセス



JR 根岸線 関内駅南口より徒歩
10 分

市営地下鉄ブルーライン関内駅
出口 1 番より徒歩 5 分

みなとみらい線日本大通り駅より
徒歩 5 分

* 横浜スタジアム向かい

〒231-8458

横浜市中区常盤町 1-7 横浜 YMCA 2 階

TEL: (045) 228-1752 Fax: (045) 228-1768

URL: <http://www.sumasen.com/>

Mail: sumai.sc@sumasen.com

ホームページもぜひご覧ください!



<編集後記>

* 2017 年度を振り返ると、「すまセンの知名度」について、感じることの多い一年だった。いろんな大学や団体、マスコミからの問い合わせにヒアリング…。外国人の家探しというテーマについて調べれば、必ずと言っていいほど「すまセン」にたどりつくということなのか。

* もちろん、相談件数も毎年増えて、今年は 1300 件を超えた。しかし、ふと考える。一番届いてほしい人たちに「すまセン」の存在は届いているのか? 新しいホームページの立ち上げや、外国人向けパンフの制作、「すまセン」を必要としている人たちに、いかに確実に情報を届けるか…。今後も努力が必要だが、一番効果的なのは、やっぱり口コミ! 「友達に教えてもらったよ!」という一言を聞いた時に、自分の襟を正す。日頃の対応が一番大事! いつでもハートと笑顔を忘れずに! (R・C)

特別版！

多文化相談ボランティア養成講座

世代を超えて多文化共生へ

～在日外国人を取り巻く社会と課題

横浜YMCAとの協働事業として、春と秋の2回実施している多文化相談ボランティア養成講座。秋の講座も盛りだくさんの内容で、全5回を終了いたしました。

その中から、多様なルーツのパネリストをお呼びした第4回の講座でみなさんがお話ししてくださった内容を抜粋してご紹介いたします。



☆居場所とは？

夢を応援してくれる先輩や友達がいる場所

☆コーディネーター

河 庚希(は きょんひ)

明治大学大学院特任講師など
(写真左)

☆ゲストスピーカー

ヒライ・デ・オザワ・エリサ

ディサービス介護士、相模原市スペイン語相談員
(写真左から2番目)

王遠偉(おう えんい)

信愛塾スタッフ
(写真左から2番目)

福島周(ふくしま しゅう)

信愛塾スタッフ
(写真右)

トルオン・ティ・トゥイ・チャン

外国人相談窓口相談員
(写真右から3番目)

ゲストスピーカーのプロフィール

は次のページへ➡

河さん：王さんにとって信愛塾はどんな場所ですか？

王さん： 中学2年生から信愛塾に行きました。信愛塾では先輩がいて、ずっと教えてくれました。そばに同じルーツを持っている人がいると、安心してなんでも相談できます。何か困ったら助けてくれるし、皆にも相談できる。心が落ち着く。何も考えなくてもいい。今スタッフになって感じるのは、みんなヤンチャだなんて思うほど元気がいいということです。

福島さん： 学校や家庭で愛情が届いてないから、スタッフに求めてくるんです。落ち着けない子も多い。王さんの言葉のサポートだけでなく、彼の背中を見て、ロールモデルとしても果たす役割が大きいと思います。たとえば、王さんの歌を聴いて「自分も歌手になる！」という夢を抱いた子どももいるし、信愛塾ではそれを応援してあげる。そういった空間、居場所を提供できていると思います。

エリサさん： 背中を押して欲しいから、信愛塾みたいな場所は大事です。

福島さん： 中学生は行動範囲が狭くて、職業も知らないから、周りに大人がいることで、将来の可能性を考えられるのは大きいですね。



河庚希さん

在日コリアン3世の私は、日本生まれの日本語ネイティブの「外国人」。一口に外国人といっても、結婚して来た人、親に連れてこられた人、祖国にいられない人、日本にいる理由は様々。今日はみなさんそれぞれの歴史を聞いてみたいです。

☆居場所は私がつくる

河さん：エリサさんの居場所はどこですか？

エリサさん：2016年10月から、外国人のための介護予防体操をする活動「SIEMPRE GENKI シエンプレ ゲンキ」をやっています。それが私の居場所です。ラテン人は「なんとかなるさ」の文化だけど、日本語が不自由、日本の文化・習慣に慣れない、年金の問題、持ち家もなく、家族もいないっていう問題を抱えている人が多い。外国人も高齢化しています。なんとかしないと。夢は、そういう方達のためのデイサービスを立ち上げたいと思っています。でも宝くじが当たらないとお金が足りません（笑）

河さん：うちの祖母も、年をとると朝鮮語になった。安心できる場は、同じ言葉の場だったんですね。

エリサさん：母国語で、自分と似た経験をもつ人と話したり歌ったりするだけでぜんぜん違う。そういうことができる場が大人も子どもも大切です。

河さん：チャンさんには、どんな居場所、こころの拠り所がありましたか？

チャンさん：家族ですけど、両親は日払いの仕事で6人兄弟を養うのに働くのが精一杯。悩みがあっても親に心配かけられない。学校では誰にも言えないし、授業についていけなくて泣いてしまう。保健室が居場所でした。



☆居場所は違いをそのまま認めてくれる場所

チャンさん：「私は変だ。みんなと違う」ってずっと思ってきました。でも父が「チャンは変ではない。花である。花は色が違う、葉っぱも香りも違う、咲くタイミングも違う。チャンはそのままでもいい」と言ってくれました。

一番居心地のいい場所は、自分の違いを認めてくれる場所です。「私の花をいいねって言ってくれる人のそばにいたいこと」それが、通訳の道でした。

今、いろんな相談をうけて思うのは、親の居場所はどこなんだろうって。言葉もできない、友達もいない。「国に帰れば？」ってすぐ言われるけど、辛くても国に帰れない。

2世の子どももまた、居場所がわからないままです。

日本語は話せても難民の子だから無国籍。パスポートが取れないので、海外修学旅行や海外留学にも行けません（*1→4ページ）。ベトナム人なのに、日本語しかわからない。「私たちはナニジンなんだ？」って。

*1:日本の国籍法では、両親のどちらかが日本人である場合、出生届を出すことで子どもの日本国籍が認められます。難民として来日し、無国籍状態の両親から生まれた子どもは、基本的には日本で生まれ育っていても無国籍となってしまいます。



王遠偉さん

9年前に中学1年で来日。言葉の壁が大きく、授業中はずっと机にうつぶせ、休み時間はトイレに閉じこもるという学校生活をスタート。両親は共働きで忙しく、夕飯もお母さんの作り置きをチンして食べる生活。中2で「信愛塾」に出会い、勉強もするようになって、日本語にも自信が持てるようになり、学校でも友達ができる。高校生のころから信愛塾でボランティアを開始。大学院進学を目指す。信愛塾は安心できる家みたいな場所。



福島周さん

信愛塾にスタッフになって約1年。以前は広告会社に勤務。自分は日本人。在日外国人との接点は皆無だった。2011年の東日本大震災で「自分の広告は被災者の役に立たない。もっと直接的に誰かの役にたつ仕事をしたい」と思う。2015年、朝日新聞のBe「フロンランナー」で信愛塾代表である竹川さんの記事を読み、自分の人生を捧げて子ども達を支援する姿に衝撃を受ける。仕事を辞めたタイミングで信愛塾に連絡しボランティアから関わりはじめ、昨年からスタッフになる。



時代の変化

王さん: 自分の頃は国際教室の参加者は自分1人だけでした。今は、中国、フィリピンの人が増えてきて、学校のサポートが増えてるなと感じます。

河さん: 外国ルーツの先生もふえればいいですね。

福島さん: 今、学校では、講師になれても教員になれない。法律で決まっていることではないのに「当然の法理」の壁があるからです。変わっていくと思います。また、学校だけでなく、地域にもロールモデルがいたらいいですね。

世代をまたぐ難しさ

河さん: エリサさんはアルゼンチンでは日系2世、日本での移民1世になりますね。

エリサさん: 私は自分の親に無理やり日本語や文化を習わされて、すごく嫌だったんです。家は日本、外に出ればアルゼンチン。例えば、うちには靴を脱ぐ文化がありましたけど、他の子とは違う。「なんでうちだけこうなんだ？」っていう疑問がありました。文化は大切だけど、うまく伝えないと嫌いになってしまうこともある、と自分の体験を通して思いました。なので、自分の子どもに文化を押しつけたくなくて、スペイン語は教えませんでした。でも、ちょっと残念です。

河さん: 世代間の難しさはありますよね。私も親に「なんで朝鮮語教えてくれなかったんだ？」って思ったことがあります。

チャンさん: 1世と2世の価値観の違いがあります。ぶつかることが多い。例えばお弁当。親は作ってもらったことがないから弁当がなんだかわからなくて、用意ができないことがある。だけど、子どもは「うちの親は作ってくれない」と思う。進路も同じ。結局子どもは一人で抱えてしまう。さらに、親はベトナム語、子どもは日本語。親子ゲンカにも通訳が必要になってしまいます。



ヒライ・デ・オザワ・エリサさん

日系アルゼンチン人2世。アルゼンチンから28年前に日本人の配偶者として来日。よく

「日本人みたいだね」と言われるが、「血は日本人、心と国籍はアルゼンチン。」

アルゼンチンでやっていた福祉の仕事を続けたかったが、相談した窓口で日本では「国家試験が必要だから諦めれば？ガイジンには無理だよ」と言われ、泣きながら帰った過去をもつ。スペイン語を活かして相談員の仕事をすると、福祉関係の仕事への思いは諦めきれず、子育てに区切りをつけた後、介護士の資格を取得。介護士をするかたわら、スペイン語で介護予防体操をするSIEMPRE GENKIを主催。



トルオン・ティ・トウイ・チャンさん

中学生で「難民」として来日。最初は住む場所も転々とし、日本語もできない、友達もできない日々。神奈川に定住するまでに引っ越し6回。高校に行きたくても、支援制度も団体もなく、寝る時間を削って、辞書を片手に勉強して、やっとの思いで高校に進学。

卒業後、働きながら定時制の大学に通学。その後、美容師の国家試験をパスし、美容師とボランティア通訳として活動をするが、通訳の仕事に自分にしかできないやりがいを感じて、「見た目の綺麗さより、心の綺麗さに貢献したい！」と、親の反対を押し切って通訳一本で活動をするようになる。

日本はどんな場所？



王さん: 大学院に行って就職を考えてるけど、先のことはあんまり考えない。ずっと日本にいてもいいし、他の国に行くかもしれない。選択肢は自由。



福島さん: たまたま自分は日本で生まれ育った、っていうだけで、主体的な選択でいるわけではない。でも、自分の居場所があるのが日本なんだと思う。家族や友人、信愛塾に関わっている人たち。この人たちがいて、関わりたいなって思ったから、今ここにいるのかな。自分を必要としてくれる人もいて、そういう環境があるのが、日本だな、って。



エリサさん: 日本はたぶん今いるべき場所。やるのがたくさんあるし、やっと好きなことができるようになったし。多忙で時間に追われて、家族と過ごす時間がすごく少ないですが、自分が母国を離れて、親のサポートなしで子育てをして大変だったので、娘達の子育てをする時、そばにいてあげたいです。



チャンさん: 日本は私にとって、素晴らしい国です。父が花がたくさん咲いている公園の写真を見せてくれたことがあります。「ここには平和と自由がある。日本は、自分たちの「第二祖国」にしよう!」と決めました。父が選んでくれた「第二祖国」。私は帰れない。ここしかない。他の国に行けない。だからこの第二祖国にもっともっと花を咲かせたい。もっと居心地のいい国にするために。

信愛塾（しんあいじゅく）

NPO法人在日外国人教育相談センター信愛塾。

南区中村町にあり、在日外国人の子どもたち、外国にルーツをもつ子どもたちの教育支援・母語による支援をしている団体。

1978年に設立し、貧困の問題、進路の問題など年間700件近くの相談を受ける。

すぐに解決できない問題も、常設形、多言語対応で“伴走型”支援をする。

<http://>

www.shinaijuku.com

横浜市南区中村町1-1-12-

101

Tel/Fax: 045-252-7862

SIEMPRE GENKI (シエンプレ ゲンキ)

介護予防教室をスペイン語で行なうプロジェクト。

(日本語も使う)

SIEMPRE GENKIはスペイン語で「いつも元気」という意味。平塚、厚木、藤沢を中心に活動。南米出身の40歳以上を対象に、「いつまでも元気でいられるために体や頭を使って体操をし、いきいきと活動的に暮らせる生活をおくろう!老後のことをちゃんと考えよう」という思いを伝えている。

<https://>

www.facebook.com/siempre.genki

○すまセンコーディネーターの感想

立場が違くと、ものの見え方や感じ方は違う。だけど、自分の安心できる場所でチャレンジしている時、人は輝ける。みなさんのイキイキした顔を見て学びました。

すまセンの活動が「どんな立場の人でも、安心できる居場所がある社会」づくりに役立てたらいいなと感じました。

(すまセンスタッフ 飯島 1ページ目写真右から2番目)

